

袋井市総合教育会議 会議録（要旨）

会 議 名	令和5年度第1回総合教育会議
招 集 日 時	令和5年7月18日(火)午後1時15分
会 議 時 間	午後1時15分から午後2時50分まで（1時間35分）
場 所	教育会館3階 ICT研修室
出 席 者	大場規之 市長 鈴木一吉 教育長 鈴木万里子 委員 大谷純應 委員 溝口知秀 委員 吉田陽子 委員 (計：6人)
欠 席 者	無し
傍 聴 者	無し
当局出席者	石黒克明 教育部長 山本裕祥 教育監 大庭尚文 生涯学習課長 小久江暁子 袋井図書館長 白井啓子 袋井図書館次長 神田明治 学校教育課長 北浦 崇 学校教育課指導係長 中村悟史 魅力ある部活動推進室長 山本 浩 教育企画課長 松井健尋 教育企画課主幹兼教育総務係長 (計：10人) (合計：16人)
会議に付した 事 件	別紙「令和5年度 第1回袋井市総合教育会議日程」のとおり

令和5年度 第1回袋井市総合教育会議 次第

日時：令和5年7月18日（火）

午後1時15分

場所：教育会館ICT研修室

1 開 会

2 市長あいさつ

3 議 事

子どもが自ら読書を楽しむまちをめざして ～より深く生きる力を育むために～

4 閉 会

1 開会

●教育部長

改めまして、こんにちは。定刻となりましたので、ただ今より令和5年度第一回の袋井市総合教育会議を開催させていただきます。暑い日が続きますところ、ご出席ありがとうございます。私の子供の頃の思い出ですと、この暑い夏に涼むため、遊びのためにはあるショッピングセンターで涼み、勉強のためには図書館の自主学習コーナーで勉強していた思い出があったなど、夏を振り返ると思いますが、今日はみなさんの熱い議論で、このクーラーの効いた部屋が外気と同じぐらい暑くなるような、いろんなお話が聞けたらと思っております。よろしくお願いいたします。

2 会議録署名委員の指名

●教育部長

鈴木委員 と 溝口委員 を指名

3 市長あいさつ

●大場市長

みなさんこんにちは。本日は、大変お暑い中お集まりいただきまして、本当にありがとうございます。先ほど、教育部長はショッピングセンターで休み、図書館で学びと素晴らしい学生生活を過ごされたなど思っております。ええ、私は宇刈大日という本当に袋井でも一番奥で山の中で育ちましたので、夏は必ず宇刈川で魚捕りと決まっておりました。朝から夕方まで魚を取って過ごしていました。当時は本当にあの用水も、自然の用水が縦横無尽に走っておりまして、河に飽きたら用水に行きたくてタニシをとるみたいな、様々な自然が今以上に残っていたなど思いながら、今お話を伺っておりました。私も叶うことならショッピングセンターでと言うところですけども、そうした街へ出てこないで、そういう環境がなかったものですから、そんな子供時代を過ごしたのを思い出しました。

さて、本日は総合教育会議と言うことでございます。石黒部長の方からもありましたけれども、今年度初めてということになります。この総合教育会議は法律に基づきまして、みなさま方教育委員と、そして市長とが情報交換をして、市内における教育政策について情報交換をしながら方向性を確認すると言う場でございます。今日もどうぞよろしくお願いしたいと存じます。

私自身ですね、市長になる前、民間の教育関係の仕事をしておりまして、さまざまな部分でこの袋井市の教育を良くして行くためには、体験に基づいた活動を子供たちにぜひ知ってもらいたい、増やして行きたいという思いでまいりました。そうした中で、社会性を養っていくということが大切で、大事だろうというところがございます。その中において、図書館や児童館など子供たちが本に触れたり、各種の体験ができたりする施設の充実が必要であると思っております。先ほどの石黒部長もですね、体験ということで、図書館に夏休み行かれたということでもあります。そうした大人になっても語れるような体験を一つでも二つでも増やしたいというところがございます。

一方、昨今のICT技術の劇的な革新に伴いまして、子どもたちを取り巻く環境は大きく変化をしております。デジタル媒体やコンテンツに慣れ親しむことで、本などの紙媒体

と出会う機会を向き合い方が変わってきている状況です。このため、教育の現場におきましても、現在の子どもたちの特性に寄り添った環境づくりやアプローチが必要であろうと思っております。本日の会議では、「子どもが自ら読書を楽しむまちをめざして ～より深く生きる力を育むために～」ということで、こちらをテーマに皆様と意見交換をしながら、袋井市における図書政策、とりわけ、子供と読書の関係について、みなさんと議論を重ねて、今後の政策の方向性を共有してまいりたいと存じます。

本市では、『教育大綱』において「心豊かな人づくり」を基本理念として掲げております。この具現化に向けた要件の一つとして、「学びたい時に、誰もが学ぶことができる環境を整える」ということを基本方針として重ねております。また、『総合計画』においても、取り組みの一つである「教養ゆたかな人づくり」に向けた基本方針として、「読書活動の推進と図書館機能の拡充」を掲げまして、様々な世代の市民が読書に親しみ、読書習慣を身につける活動を推進するとともに、図書館が本を通じて市民が交流し、学び合う場となるように、図書館機能の拡充に取り組んでいるところでございます。

この中において、市では令和3年度に第4次の「袋井市子ども読書活動推進計画」を策定致しまして、子どもの読書環境の整備に取り組んでいるところでございますが、本日はその子どもの読書環境の充実に向けまして、本市の現状を確認していただきますとともに、抱えている課題もいくつかございますので、その解消のために本市が向かうべき方向性、必要となる施策などにつきまして、みなさまと協議をしてまいりたいと存じます。ぜひ忌憚のないご意見を頂けますよう、よろしく申し上げまして、私のご挨拶とさせていただきます。よろしくお願い致します。

4 議事

子どもが自ら読書を楽しむまちをめざして～より深く生きる力を育むために～

●石黒教育部長

それでは早速内容に入って参りたいと存じますが、本日、この会議を開くにあたって、事前に資料を委員のみなさまにはお配りしてございます。前半少し使いまして、前の映像でポイントを担当者から説明をさせていただいたのち協議という形になります。協議の段階では、委員のみなさま方に向かい合うコの字の形に席を変えさせていただいて、議論をしていただくと言う流れになっておりますので、よろしくお願いいたします。それでは議事に入ります。ここからの進行につきましては、市長にお願いをいたします。

●大場市長

それでは議事に入らせていただきます。協議は全ての説明が終わったのちに、まとめて行うと言う形にさせていただきます。はじめに、「子どもが自ら読書を楽しむまちをめざして ～より深く生きる力を育むために～」というテーマにて事務局より説明をお願いします。

●袋井図書館長

資料に基づき説明

●大場市長

はい、ありがとうございます。以上が事務局の説明となります。今のかいつまんだ説明ではございましたけれども、事前にお目通ししていただいて、説明も受けているということでございますので、今回の説明に限らず、この資料上の説明、また色々と日々疑問等感じているいらっしゃる事があれば、自由にご質問していただければと存じます。そういったことも含めて協議と言う時間にさせていただきます。本日は、具体的な何か結論を出すということではなくて、みなさまから幅広い意見をいただく中で、子どもの読書環境の充実、これに対して、本市が取り組むべき政策の方向性を形にして行ければと考えておりますので、様々な視点から、また観点からご意見を頂戴したいと思います。どうぞよろしくお願いたします。

どうでしょうか。どなたか口火を切っていただける方がいらっしゃればありがたいですが。

●吉田委員

まず一点お願いします。学校図書の意味で、この時代なので、電子書籍の導入を考えていただきたいなと思っています。やはり子供の話を聞くと、例えば教科書で図書を紹介されて、これを読みたいと思っても、同じ学年でみんなそれを見て殺到して、読みたいと思った時に借りられていて読めない、それで待っている間に興味をなくしてしまうということがあるので、興味を持った時に、本来なら紙がベストなのですけれども、取っ掛かりとして電子書籍でも読めると、読書環境の充実という意味では寄与できるのではないかなと思います。

●大場市長

はい、ありがとうございます。学校図書館の最新システムの状況ですが、資料30ページに、各学校にどのようなシステムがあって、どういう更新がされているかということが載っております。これが2023年の資料と思えないような、ネットワークにもつながっていないような旧式のシステムが単独で動いているという状況でございます。今、電子書籍という話がありましたけれども、残念ながら今は電子書籍とはほど遠い環境ということになっております。今、吉田委員がおっしゃっていただいたような、そういう時代が今私たちの時代ですので、一刻も早くそういう状況を作りたいと思っております。その辺りについて、図書館の側から補足や状況説明、また今後に向けての何かあれば説明をお願いします。

●袋井図書館長

電子書籍は図書館としても導入を考えております。ただ、図書館で入れても、結局、1ライセンスしか使えないので、同じように子供たちが一斉に来ても順番にという状況になってしまいます。ただ、学校として入れると、そういう契約であれば、子供達に一冊の本をみんなで読めるというようなことも出来るので、そういったものを入れていけば、市立図書館とは切り離して学校図書館用に電子書籍を入れていくということも可能ですと、こ

の前ちょうど業者が来て言っておりました。ただ金額的なこともあります。文部科学省からも、電子書籍を推進するように、市立図書館に電子書籍を導入して、パスワードのようなものを全部の小中学生に配って推進するということも来ていましたので、そちらは私ども考えていかなければならないと思っている状況です。

●大谷委員

その件で違う切り口から。もう少し大きいところからで、みなさんもよくお話されているのですが、私も実は個人的な見解として、実は教育の現場にICTを導入することについては、大いに賛成しているところです。ただ、そのICTを導入するということをしつかり明確に分掌していくと、いくつか実は役割があって、例えば学校の教育現場全体にICTを導入することで、一つは、たとえば先生、あるいは学校の職員としての校務の効率化が図られて、非常にいろいろなものが軽減されるし、仕事もしやすくなる。もう一つは、学校の運営そのもので、保護者の方、子供たちも含めて、ICTが導入されることによって、さまざまな情報が大きく共有できるようになるというメリットがあります。もう一つは、やはりみなさんにタブレットを持たせて、それで教育をするということで、実はこの3番目については一定の成果があるのかも知れませんが、実はそこに未知数の部分が非常に多いので、なかなか難しく、慎重にというのは、ずっと昔から実は言い続けているところです。もちろん実はそこが一応お金かかる場所なわけですが、図書館、図書室についても、実は私も同じことが言えるのではないかと思います。ICTを導入する、電子化をするということは非常に重要なことだと思うのですが、まず取り掛からなければならない、一番大きなところはネットワークをしっかりと構築して、システムとしてのいわゆる電子化というものをどれぐらい進めていけばいいのか、市長さんがおっしゃられたとうり、バージョンアップも何も、今使われてないでしょというOSが使われていて、これはいくらなんでもないでしょうと思っているところです。確かに一般の図書館に置いても、電子書籍ってというのは、まだまだもう少し時代がさがってくると、おそらくライセンス料金も下がってくるし、もっと使いやすい時代が来るのかも知れませんが、まだまだ非常に高額であるというところが、現実のところだと思います。学校の図書館におけるICT化で一番重要なのは、電子書籍の導入以前に、市長がおっしゃられていることそのまま、そもそも電子書籍を扱おうとしても、システム自体が成り立っていない以上できないのだったら、システムをうまく構築していただくと同時に、何ができるかっていうと、システムが構築されれば、今度は紙の書籍も今おそらくいろんな形で、これさっきどこか出ていましたけれども、図書は後ろに全部背表紙にナンバリングされていて、どこに何があつてとか、どれくらい貸し出しされていてとか、あるいは学校全体とか、市内全体を見渡した時に、この書籍って一体何冊あるとか、そういうのが全部、システムが構築されれば、おそらく非常に効率化が図られて、司書の方の仕事もおそらく非常にやりやすくなるでしょうし、今度は先生方からしても、図書館、学校の図書室を使って、様々な形で学力の向上に繋げるところのいろいろなものが見つかるのではないかと思います。実は私は電子書籍うんぬんというのは、ちょっと時期尚早なのではないかと思っているところです。むしろ、やるのであれば、とにかくシステムをなんとかして欲しいと。そこはお金かけていただければいいので。なんとかシステムを、やはり全部の小中学校、もっと言う

と、幼稚園ぐらいまで。幼稚園にこの前行かせていただいて、図書がたくさん置いてあって、この図書はみんなすごく読むんですよ、とか言われているものがボロボロになっていたりしています。そういう管理とか、効率的に活用することのまず基礎として電子化というところの一番重要なところは、システムとかネットワークの構築ではないかなと思っていますので、そこはぜひお金をかけて、一日でも早くやっていただければなというのが、議会の承認もあるかも知れませんが、お話を聞いていて思ったところです。

●溝口委員

今話をそのまま。ちょうど先月ニュース見ていたらと言いますか、実は国からの交付金が出ているんですね。公立小中学校の図書費用というのが出ている。それが全国自治体調べたら50何%しか使われていなかった。交付税に使っていいというものなので、図書に使わなければならない、とうわけではないですが。袋井がどうかかなと思っても、なかなか分かわからなかったのですが、最近流行りのあの生成AIって便利ですね。袋井市、どのぐらい見て見たら、一応答えが、21年度ですけど、1億3000万円の交付金が一応名目上あって、6000万円、47%使っているという、これが正しいかどうか、ちょっと分らないですが、そういうお金もあるので、うまく使えば使えるのかなと。今まで他にもっと使わなければいけないところがあったり、当然忙しかったりで、こんな形でシステムが正直ずさんな形にはなっているのかなと。そういうものをうまく使っていただいて、大谷さんが言われたように、確かにシステム構築は必要かなと思っています。

あと、資料の36ページに、おもしろいことが書いてありまして、「まちじゅうとしょかん」と書いてくれていますね。これ見て面白いなと思ったんです。先ほどあったように、小学校に本を借りに来たけども、小学校にはなくて、別の場所にあったが、そこに行きづらい。だったら、せつかくこういうシステムを入れるのであれば、袋井独自のものとして、例えば幼稚園だろうが、小学校の図書館だろうが、市立の図書館だろうが、全ての蔵書がどこに何があるのかが見えて、それが例えば、子供たちのタブレットからでも予約ができる。おじいさん、おばあさんもタブレット使って予約ができる。もっと言えば、それを翌日とか翌々日に自分の近くの借りたい場所へ届けてくれて、そこに借りに行けるのか。せつかくシステム化するのであれば、デリバリーが大変だと思うのですが、それをやれば子供たちも自分の近くで本が借りられる。例えば、コンビニが袋井市の仮想の図書館になっていて、そこで貸し借りができる。自分で予約すれば多分そんなことができたなら、子供たちも楽でしょうし、将来もっともっと増えてくる年寄りの方ももっと図書館とか本になじめる。ここに書いてあったので、「まちじゅうとしょかん」というのは袋井のやり方としていいかなと。立派な図書館だって、観光に役立てるよりもっと素晴らしいものができるんじゃないかな。システム化のひとつはそこらへんかなと思いました。

●大場市長

はい、ありがとうございます。教育総合会議の一つの目的と申しますか、今日冒頭のごあいさつの中でも、法に基づいて、教育のみなさんと市長が一つの合議体を持って情報交換する。大きな目的の一つは、教育側と行政側がリンクをして予算を行政がきちんと確保しなさいということだと思います。教育の内容そのものに関しては、わたくしたち行政側

が直接入り込むことはある意味できない部分もあって、これは一線を画する部分があるのですが、とはいえ、予算に関してはですね、行政側に市立小学校、中学校の場合にはそれを託されていると、要は金を出すのは行政、それを使ってより良い教育をしていただくのは、教育員、教育委員会であるということなので、教育委員会のみなさんと教育委員のみなさんと、こうして情報をすり合わせて、それって必要だよねと思えば、行政側がしっかりお金を出して必要な予算措置をして行くということ、これが大きな目的の一つだと思います。そういうことからしますと、今おっしゃっていただきましたような、システムに関してきちんとお金を出していく、用立てをして行くということは一つの役割だと思って、今お話を伺いしておりました。確かに、先ほどお金の話が出て参りました。1.3億円のうち、6,000円使ってという話がありました。何か使っていない予算があるかのような印象を受けましたけれども、おそらくAIが何かいろいろな情報を出したんだと思いますけど、使える予算は使わせていただいて、もうカツカツの状態でもうない、米櫃をもうひっくり返しても出てこないぐらい、実はお金をいろいろなところに使っている状況でありまして、そうした余力がないために、この30ページの図書館システムの状況にみられるように、システム更新が出来ずに今日まで至ったという状況であります。大谷委員さんからお話がありましたように、タブレットの配布は済みました。もう2年半前以上、もうすぐ3年になりますけれども、一人一台のタブレット配布が完了して、教育にさまざまな形で使われているという状況で、みなさんご案内のとおりでございまして、それを有効に活かしていかなければならないということで、学校そのもののネットワークの環境、それはかなり充実してきているのかなと思います。国からも予算を頂いて、そうした整備が進んでいるという状況でありますけれども、残念ながら、システム化が図書館にいていないということでもあります。この図書館システムに関しては、本当に立ち遅れた状態ではありますけれども、今あの溝口委員にもお話しいただきましたように、様々な可能性や仕組みが世の中には存在していて、お金さえ出せばいろんな便利な環境も整うし、溝口委員におっしゃっていただいたようなデリバリーシステムのようなものが、現実的には可能ではありますけれども、用立てる原資をいかに確保するかというところでございます。図書館もそうですし、教育委員会側もそうですけれども、いろんな形で有効な教育予算を適正に配分するという中において、図書館が後回しになってきてしまったことが非常に大きな反省点だと思います。けれども、これから、改めて今日の協議なども含めて、しっかりと私自身も先ほど申し上げましたように、予算の確保をしっかりとしながら、必要な、時代にあった図書館システムであったり、ネットブックも含めて図書を閲覧できるような環境を模索できるといいなと思っております。とにかく予算の確保ということが、もう本当に切実な課題でありまして、そうした中で図書館、担当の方は、なけなしのお金を工面しながら頑張ってくださいというところでもあります。そうした中において、22ページに、ちょっとデジタルとは離れますけれども、本を読むことが好きだと答える児童生徒の割合が、令和4年度の数値が出ております。分かりやすいのがこの右側のグリーンのグラフに、参考として県との比較が出ておりまして、袋井市の小学校では、県の65.2%という数値に対して79.1%、中学校においては60.3%という県の数値に対して74.5%と、本を読むことが好きだって答える生徒が非常に多いんですね。これは素晴らしい事だと思っております。まず本を読むことが好きで、なおかつそこから図書の世界をより広く広げていってもらう、

より深く本の世界に入っていってもらい、図書館との関わりをより多く知ってもらって、ということが非常に大事だと思っております。こうしたこれまでの教育委員会や、そしてまた様々な保護者も含めて、子供たちへの働きかけの結果、こうした良好な数値になっていると思います。今縷々、私自身もお話をさせていただきました、デジタル化との兼ね合いもありますけれども、デジタル化とリアルな本との接点もいろいろな形で広げていく必要があるかと思っておりますけれども、電子書籍のお話にも続いて結構ですけれども、この本を読むことが好きだと答える子供たちが多い中、より一層本に親しむ機会を増やすために、電子図書以外に何かありますでしょうか？

●鈴木委員

電子図書は、ちょっと置いて。さきほど、図書館員の方が訪問してっていう、不登校とか、教室には入れない子について、私はすごく心に残って、やはりその子供たちにとって図書室っていうところが居場所になっていけるといいかなと思っています。この本好きの子に対して、読み聞かせを自分もやっています。今、地域の方たちもいっぱい入っていますが、以前に比べて、保護者の読み聞かせへの参加、それは時間的な問題もあるんですが少なくなっているんで、そこもちょっと増やして行く努力したいなと思うんです。そこに地域のボランティアの手を借りて、やはり本に触れさせる時間は必要なんじゃないかなっていうふうに思いました。あと、システムの話についてですが、学校図書館で10年、20年ぐらい前は、まだバーコードは入っていませんでした。一生懸命、その頃、10年から20年前、私が最後の退職間際ぐらいの頃に、このスクールプロというシステムが入り、全部図書館の担当の方たちが、バーコード処理して、パソコンで管理をするようになって、カードがなくなってきたと思うんですが、ただその時にも、本当は全部の学校をつなげたい、図書館につなげたいっていう希望がずっとありました。図書館とつなぎながら、どこでも本が見られるというシステムを構築していくというところまでやっていただきたい。ただ、インターネットにつなげるだけではなくて、やるならば一元的に貸し借りができるところまでやっていただけたらと思います。そうすると、地域の方も、さきほど「まちじゅうとしょかん」ということで、地域の方が学校の図書館に読み聞かせにも来るし、そこに居ることができれば、居場所がない子がちょっと図書室に行って本を読もうかということもできるんじゃないかなと思います。子供が遠くの図書館は行けないのと一緒に、大人も年をとってきた人たちも、図書館に行くのが大変になってきたら、特に離れているところはそういうような感じにさせていただくといいかな。やはり子供が読書好きになる、本が好きになるためには、周りに本をあふれさせる必要があるのだけでも、今子供たちの環境、家庭でも本を読んでいる環境ってなくなってきました。私たちも、電車に乗って一番わかると思うんですが、昔はみんな本読んでいたのに、今みんなスマホをいじっているというように、本を読んでいる人は本当に数少なくなっているのですが、市立図書館は大人、いろんな世代の人たちが楽しんで行けるし、本が取りやすい、すごい楽しいとか、分かりやすいとか、今、実際に図書館に行っても本を探すのがすごい大変なんです。そういうような環境を作ってあげることも、やはり読書好きの方のためには必要です。昔は一カ月に4冊本に触れた子っていうのが、読解力とか学力の面で境目と言われていました。だから、それ以上たくさん本を読んでいて、本読めば読むほどいいのかということ、そ

うではなくて、やはりそのぐらいに1週間に1冊ぐらい読める。昔はあの教室で、必ず1冊読みかけの本を置いておきなさいって言っていましたが、今はそういう環境は子供たちになくなって来ているのですが、ぜひ本に触れる、地域の大人の方も、そこにいられるといいかなと思います。独立図書館的なものが、学校図書館が地域の図書館というか、まちなかの図書館みたいな環境が作れたらいいかなっていうふうに感じます。

●吉田委員

鈴木委員に付随する形なんですけれども、やはり学校の中で教室に入れないうつていうのが一定数いますし、そんな子たちも図書館ならいられるというようになれば、教室復帰の足がかりもなりますし、そのためには、地域の方がデリバリーシステムなどで訪れる、そこに行けば誰かがいてくれるっていう居場所づくりっていう意味がすごく大事になってくると思うんですね。システム構築とかってわりと目先に思えるんですけど、まずは図書館のあり方ってものを包括的に考えて、例えば図書館の機能では、様々な年代にアクセスできるという大きな特徴があると思うんですね。その特徴を活かせば、交流の場が生まれる。交流の場としての図書館というのを設定した上で、「まちじゅうとしょかん」として学校図書とか、そういった大きな図書館のあり方を考えた上で、貴重な予算を振り分けるっていうように考えてもらえたら嬉しいなと市民として思います。

●大場市長

出会いの場、居場所といった図書館の機能ですね。それが出会いの場が、ただ単に学校内にとどまらず、社会における出会いの場であり、居場所であると。非常に価値あるご提言をいただきました。何かそのあたり、事務局の方からございますか？

●大谷委員

さきほど吉田さんがおっしゃったことの中で、そこだ、と感じるところがありました。何かって言ったら、そこに誰かいるってことはすごく重要なことで、さきほどのシステムの話もそうですし、地域と何かをつなぐということもそうなんですけども、やはりそこにいわゆるマスターになってくれる人が、とにかく常駐していない限り、さっき市長が、今この本が好きな子がたくさんいて、袋井市すごいねって言っていたんですけども、実はその返す刀でこんなこと言っちゃいけないんですけども、多分、そう言うつもりで載っているかどうか知らないんですけど、これ見てみると、図書の貸出冊数の問題がどこかにありましたよね。26ページ、27ページ。自分が好きだって言っているわりには、全国平均から見たら、下手したら学校によっては全国平均の1割にも満たない冊数しか貸し出していない学校があります。例えば、ある中学校では1年間の1人当たりの貸出冊数0.4冊ということで、もう1人1冊も借りてないような状況です。これは、本が嫌いとか本離れということではなくて、やはり実際は本が好きな子が多いと思うんです。市長がおっしゃったとおりで、今までやはりすごく地道な取り組み、いろいろ読み聞かせなんかも含めた、特に未就学児とか、お子さんに対する取り組みをすごく一生懸命やってくださって、今度は就学すると自分たちが図書館に行って好きな本を読みたいから図書室に行く、図書館に行く、図書館は司書さんがいて、学校には本来は司書教諭がいて、行政によっても違

いがあるかも知れませんが、図書館に行っても閉まっているとか、誰もいないから借りたにしようと思ったら、閉まっていたとか、借りようと思ったら、司書の方がいなかったのだから借りられませんというパターンが、実は袋井は多いのかなと思っています。おそらく本が嫌いなわけじゃないのに、貸出冊数がどう考えても、やはり全国平均から見ても少ないところを鑑みると、おそらく貸出が出来る環境が整っていないのかなと思います。それは、おそらくシステムの構築とか、蔵書数が云々とかっていうことではなくて、それをちゃんと扱って、ちゃんと子供たちにしっかり渡せるシステムを使う人間、あるいはその本を管理する人間、地域をつなぐ人間ってところの司書さんの存在っていうのは、多いか少ないか分からないですけども、もしかしたら、学校の図書館にいる司書さんがいる日数が、実際に比べたら他よりも少ないのかなっていうのは、これを見て思った感想です。予算の話になってしまうと、予算っていうものは、おそらく限られた予算であり、どこからか引っ張ってくるのが難しいということではなくて、おそらくどこにプライオリティを置くかっていうところなのかなと思います。せっかく市として子供たちの本を読む環境を整えるということに対して、かなり心血を注いで、これだけのいろんな取り組みがなされて、結果として、本を好きだという子供達が増えているとするならば、今ここは道半ばのところ、おそらく今まであの水道で言えば10mm管だったところが、一生懸命頑張って50mmまで太くなったんだけど、最後の出口の蛇口の所が非常に細くて、水がちょっとしか出ないので、本を借りたいと思っていても借りれない子が増えてしまって、そこがまた本離れに繋がっていくのであれば、最後の蛇口にあたる部分の水がザッとちゃんと出て、水がすごく来てよかったねっていうのと同じように、図書館に行ったら本が借りられて良かったねとか、司書の人に色々教えてもらって良かったねとかっていうことを作っていかないと、おそらく本好きとか、あるいは未就学児が小学校に上がって、中学校に上がって、その後我々も手が離れて行くかも知れませんが、今度生涯学習の中でずっと一生を通して本を読んで教養を深めていく市民を作るところに向けて、小学校、中学校のところ、もしかしたら借りるってことに対してすごく手薄になっている可能性があるんで、そこは調べていただいて、もしそうだとしたら、ぜひそこにしっかりと予算をつけていただきたいと思います。司書を配していただく。司書っていうのは、僕が行っていた大学では、大学でも教員の養成とか、あるいは学芸員の養成などと並んで、司書ってすごくたくさん養成していた大学だったので、だからやはりさっき言った教員にしても、学芸員にしても、司書もやはり図書というものを通じて、人を教育していく立場にあり、わざわざ大学に行って資格を取ってという立場の人なんですから、そういう人たちはやはりしっかり加配していただくことが、本来我々が目指すべき教育の在りようではないかと思っています。ぜひ市長にはそのところ優先順位をちょっとでも上げていただけないかなっていうのが、教育委員としての個人的な意見です。

●大場市長

ありがとうございます。

●鈴木委員

たぶん学校司書は、今全然配置されていないと思うんですが、小中学校、昔は図書委員が貸し出しをしていました。今もそうだと思う。そのような感じだから、昼休みの一定の時間に貸し出しで、たぶん、各学級にある本はこの貸出冊数には入っていないんじゃないかなって思うんです。学級に置いてあるのもあるし、中学校も先生によっては学級文庫を作ってる方もいて、そこで貸し出すっていうのは、これよりも実際はもうちょっと多いかなっていう気がします。ただ、中学生に聞いたら、図書室行ったことないっていう子がいました。なんでって言ったら、アニメと恋愛小説がないからだっていうことで言ったんだけど、いや、そんなことはないよ、本はいっぱいあるよ、っていう話をしたんですが、そもそも小学生は、授業の中でもやるし、多分今の時期は、みんな夏休み用の本の貸し出しをしに連れて行かれて、本を2、3冊借りてくるんじゃないかなと思いますが、そういう経験は少ないので、司書がやはり常駐していただくことは必要なんですが、さっき。それが予算的に無理だったら、さっき言ったボランティアでもいいので。中学生との話をしたら、朝登校した時に図書室が開いていると嬉しいなんて言う話もしたこともあります。誰かしらそこに、ボランティア的にいれば、まずそれを取っ掛かりに、本来的に司書がいていただくっていうのはいいんだけど、1週間に1回図書館から来ていただいて、サポーターの方が今年がいなくなっていると思います。

●大谷委員

サポートでもとにかく人がいることが大切だと思います。お金がないからですかね。

●袋井図書館長

サポーターが行っていた分は、図書館から行っているのでも、そこで時間数が減っているということはないです。むしろ、夏休みとか冬休みの長期休みの図書館からは出向いて行けるので、その分は時間的に増えているんですけど、週1日だけっていうのは昨年度と変わりはないです。他市と比べても少ない現状です。

●溝口委員

学校によって取り組みが違うんですかね。僕もすごく気になったのが、小学校の中でも例えば割と高い比較的貸し出し数が多かったりとか、小学校に関して、例えば2倍、2.5倍ぐらいの開きが、中学校行ったら10倍ぐらい開くことがあって、学校によって違いがあるっていうのは、たまたまそこに本好きの子供が集まったというよりは、おそらくなんか学校の取り組みなのかなって気もするんですけどね。

●学校教育課長

おっしゃるとおりです。学校によって取り組みは違うので、あと図書館担当になった教員がどんなことをやるかによっても若干変わってくるという状況があります。

●大谷委員

結局、司書教諭ではなくて、普通の教員の方で、図書館を活用しようと思う気持ちがある人が色々取り組みしたりするということですよ。

●学校教育課長

図書館担当の考えもありますし、もう一つはその日課が関係していますね。そういった子供たちがあの本を借りに行きやすい日課になっていたと。

●大谷委員

そういう突っ込み要素があって、全然違うというのはまずいですよね。全国平均と比べて。

●大場市長

大谷委員が最初に言っていた、本好きの子がいるのに、こんなに平均値が県と比較して高いのに、実際の貸し出し数が、全国平均と比べて乖離が非常に大きいと、まさにここが課題でありまして、これをどんな形で解決できるかっていうところが、大きな一つのポイントだと思います。そうした中において、学校司書の話なども、31ページにありまして、他市町と比べても、いろんな仕事内容を考えるとやはり足りないというのはもう明らかであります。そうしたこともコストに絡んでくることでもあります。そうした学校による差、そしてトータルのにも貸し出し数が伸びていない。予算も限られているという状況の中、取り組んで、図書館が中心となって取り組んでいただいているのが、先ほどからお話に出ています「まちじゅうとしょかん」であったり、基本となる「袋井市子ども読書活動推進センター」、これを立ち上げていただいて、図書館のスタッフが学校の図書館に向向いて行って、さまざまな情報を提供する。子供たちの興味を引き出すように活動して行く取り組みをしていく、そういうことによって、各小中学校での差もできるだけ解消していこうと、なおかつ学校の負担を減らしていこうという、大変涙ぐましい努力をしているところでもあります。38ページに、この「袋井市子ども読書活動推進センター」とはなんぞや、ということを図示したものがございます。この活動は今年の4月からスタートしていただいて、重複しますけど、貸出冊数を増やし、小中学校の格差を減らして、図書に対する興味関心を引き出そうという取り組みが、非常に大きなステップになるのではないかなと思っております。こうしたことは、本当に予算の確保というのは、私たちに課せられた大きな課題でありますけれども、それはそれとして頑張るとしてですね、なしでも、こうした活動もしてもらっていることは、本当に私としては感謝もしておりますし、こうした活動が充実していることが、子供たちの本が好きだということ、さらに実質的なプラスにつなげていけると思うんですけど、この部分ちょっと私の説明では足りないので、PRをしていただいて、どんなことを目的としている活動を始めたかっていうことをちょっと補足していただきたいと思いますが、どうでしょうか？

●袋井図書館長

「袋井市子ども読書活動推進センター」が、今年から全校に職員が行くようになったんですけど、去年は小学校2校、中学校1校で、試行という形でやらせて頂きました。その中の取り組みとしましては、39ページから載っているんですけども、まずは子どもたちへの働きかけっていうことで、昼の放送で本の朗読をして、例えば詩を読んだりですと

か、あと長い物語を毎週毎週行くたびに続きを読んでいくってというようなことをやったりですとか、お昼休みに読み聞かせをしたり、中学校ではブックトークという本の紹介をお昼休みにさせてもらったりというような取り組みをしています。もちろん紹介した本は図書室で借りられるようにしております。ただ、全員分は本がないものですから、市立図書館から少し補充をして、なるべく多くの子供達に、興味を持った子が借りられるように、ということで準備はしております。こういった取り組みをしておりまして、例えば中学校でブックトークをやると、面白そうだから借りてみたいなって言う子がいたり、小学校の子供達は今日は何を読むのって言ってきたりとかって言うように、楽しみにして待っていてくれる姿っていうのが見て取れるということも報告で受けています。また、やはり整備という点でも、なかなか古い本がそのままであったりですとか、おすすめの本なのに、古いままで買い替えが進んでいなかったりっていう状況がありましたので、図書室が魅力あるものになるように整えて行ったりとか、先ほど鈴木委員から言われたように、学級文庫というのはどの学校にもありまして、それも実は4月に設置したら、3月まで同じ本なんです。そうすると、もう子供達の中では景色になってしまって、なかなかこう手に取るっていうところにもいかないので、2ヶ月に1回ぐらいは入れ替えをしたいっていうことで、今なかなか入れ替えするのも大変なんですけれども、入れ替えをして、いつもこう新鮮な気持ちで本に向き合えるようになっていうように手をかけている状況です。このように、やはり子供たちの周りに本があるけど、やはり魅力的な本がないと、子供たちもあるだけでは手に取らないので、ここが面白いよ、こういう本があってねって、おばさん、これ好きだよってというような形で、子供達に紹介すると、じゃあ読んでみようかなっていうように思ってくれるので、やはり本があって、人がいて、さらにシステムがあると、三角形がうまく回って読書活動というのが進んでいくかなと思います。今、センターに職員が行っているんですけれども、やはり本の登録にもすごく手間がかかっている状況ですので、そこも解消していけば、もっともっと子供達に向けた取り組みというのが進んでいるかなというように思っています。

●大場市長

ありがとうございます。先ほどからいろいろな図書館、そして市の図書館、学校図書館、そののさまざまな取り組みが一体として、良い魅力を出していこうという話がありましたけれども、そうした中に、大谷委員、鈴木議員、吉田委員、溝口委員からいろいろアドバイスいただきましたけれども、出会いの場であったり、開館の時間の問題であったり、ボランティアの人たちに、より積極的に参加していただくとか、そうしたことも盛り込まれていくと、お金がないところに、よりプラスの魅力が出てくるのかなと思います。本当に予算の確保が改めて大事だなと思って伺わせていただきましたけれども、他に何か本により多く触れて、なおかつ貸出冊数であったり、それが子供たちの読解力につながっていけば、なお良しということなんですけれども、そういったことに向けての何かアドバイスであったり、感じるころがあればお聞かせいただければと思いますけど、いかがでしょうか？

●溝口委員

さっきもちょっと出たんですけど、幼稚園を何か所か回らせていただきまして、やはり今幼稚園の問題、就学児童といますか、子供さんが減ってくる。すごく立派な広い幼稚園があっても、使っているのはこれだけだとか、先ほども人が集まる場所ってというのがあったんですけど、うまく幼稚園の一角を、幼稚園にある図書をもうちょっと増やしたりして、市民がどなたでも入れる、お母さん、お父さんが早くから来て、子どもの本を探して借りて行けるとか、年寄りの方がいてくれて、休みながら本を見ながら子供たち眺めてくれるとか、だんだんそういうことやっていかないと、幼稚園の存続というか、幼稚園のあり方というのも難しくなってくる。それがだんだん小学校にも普及してくれる。次は、小学校を見なければいけないとか。そういう広い見方をぜひ今考えると嬉しいなというように思います。教育長さん、そのあたりどうですか？より広く社会との接点とか、施設をより有効に生かしてとか。

●教育長

ちょっとその前に、話が重複して申し訳ありません。「袋井市子ども読書活動推進センター」が、今年度から本格的にやり始めまして、昨年度は3校でモデル的にやって、これだったら大丈夫だろうということで、本年度は本格的に、16の小中学校と公立の園にも図書館の職員が行ってくれています。実はどんな状況かっていうことと、司書の職員と話す機会を持ってしまして、図書館に勤める方々とも、この間、私と部長と教育監3人でざっくばらんに色々話ししましょうと言って、管理職がいると話にくい、だから管理職がない場で、その実際、図書館で働いていただいているみなさんとお話をしました。学校に行っていてやっている取り組みについては、自分たちも自負を持っていて、なんとか学校の図書館をもっと良いものにしたいと思っているという気持ちがあって、子供達にいっぱい本を読んでもらいたいと思っています、っていうことで、すごい熱意を持ってやってもらっているんですけども、いかんせん条件、環境がひどすぎますという話が出ます。このシステムもそうですし、それからやはり本の蔵書が、なんでこんな本がまだあるんですか、とか、なんでこんなボロボロの本をとってあるんですか、という状況でして、しかも私たちの目から見ると、なんでこんな本を買っているんですか、というものもあるというので。やはりもっと環境を整えないといけないなということを感じられました。それも一つと、あとやはり私たちが一生懸命やっていますが、市図書館の仕事をやりながら、学校の図書館の仕事をやるっていうのは結構大変です、と言われていて、僕らが良かれと思って始めたんですが、ある意味属人的な努力におんぶにだっこしてしまっていたなということすごく反省しました。だから、できるだけ効率的に行うためにも、システムもそうですし、非常勤の職員を増やすような算段をしないと、今の「袋井市子ども読書活動推進センター」がパンクしてはいけないなと思っているのが正直なところです。ですが、すごいいいことやってくれていると思っているので、これをなんとか継続して行きたいなというように思っています。実際に学校の方で、ある学校ではすごい歓迎というか、子供たちがわくわくして待ってくれている。今日はこの本を読むよっていうと読み聞かせのところに、ものすごくたくさんの子供が集まってくれているっていうので、実際の効果はあるなというように思っています。それで、もう一つの課題は、実は図書館のその人たちが言ったのは、学校に入っていくのにハードルが高すぎますって言われまして、学校って閉鎖的

なところだから、部外者が来るとアウェー感が満載ですって言われたので、それはもう申し訳ありませんということで、教頭会で激を出しました。何ということだと、もっとウェルカムでやってくれっていうように言いました。ですが、ことほど左様にやはりまだ始めたばかりなので、まだまだ認知度が低いところがあると思いますが、やはりちゃんと仕組みなどを整えてあげないと、この芽が育っていかない、花が咲かないかなというように思っているのが正直なところですよ。あと、溝口委員がおっしゃった、施設の有効利用というのは確かに一理あるなというように思っています。今の幼稚園の状況が、おそらく小学校にだんだん来ると、小学校で空き教室、何なりというところはやはり現実問題として出てくるんだろうなというように思っています。今の状況で言うと、なかなか放課後児童クラブが学校に入っているんで、今、実際に空いているところはないですけども、図書館のところをもう少し充実させるというのが、一つの方策として、開かれた教育課程と言っているんで、社会地域の人たちに、一部を担ってもらう仕組み、まさに共創のまちづくりみたいな所を図書館でも実現できるというように思っていて、それが「まちじゅうとしょかん」に繋がればいいな、というように伺って思いました。

●大場市長

はい、ありがとうございます。

●鈴木委員

この読書推進センターについては、この前広報でも載っていましたが、読み聞かせは自分も地域の人達入れてたくさん参加していただいて、その部分は任せたりして、図書館の人が、司書の人が、司書でなければできないっていうところに注力する。昼休みとか大変だけど、読書の時間、朝なりに行ける人、行けない人もいますが、退職した人だったら昼でも行けるので、そこをうまく構築してくれたらと思います。アウェー感は地域の読み聞かせの人たちが行っても感じているのは確かなんです。図書館が地域に開かれてっていうんだけど、もっとオープンに入っていけるといいねっていう声はいっぱいあります。自分で出てみてそう思いました。

●教育長

話し合いの時に、一人の人から、あなた何しに来たの、っていうようなオーラを感じますって言われまして、本当に申し訳ありませんって謝りましたけど。

●教育部長

一点、数字的なところで補足をさせていただくと、資料のP. 42、43。参考資料として、42ページには、上の段に令和4年度、下に令和5年度で正規職員、それから通年のパート職員、短期のパート職員の人数を載せてございますが、令和4年度に合計で、正規が5名、通年が13名、16名という体制で、3つの学校で読書活動推進センターを試行をし、令和5年度には、先ほど教育長が言ったとおり、16小中学校、プラス幼稚園に拡大をしているんですが、その時にですね。実際、その現場に行ってください通年パートの人数を増やし切れてない中で、いざやってみた中で、現場のいろんな職員の意見を聞いてみると、こ

の方々やはり本が好きな方で、子供達に読書の機会を与えようということで、すごい熱意を持って行ってくれているんですが、現実と仕事量の具合が合ってなかったなというのが今の現状です。下の43ページには、全体の職員の人数の比較も載っていますが、図書館自体の職員の正規の人数が少ないという現状も、改めて充実を図っていくには、こうした数字的な根拠もあるものですから、マンパワーの充実っていうのも合わせて行う中で、せっかくいいことをやっているにもかかわらず、その方々が疲弊していかないような体制も作っていきなというところで考えています。ぜひ、みなさんの応援とお願いでしょうか、お考えで、この事業の後押しもしていただけたらと思います。よろしくお願ひします。

●大場市長

はい、ありがとうございます。アウェー感の話ですが、先週でしたが、軽トラックが校庭にツッコんだということがあったり、昔の話でいけば大阪の池田小学校、あれ以来、門を閉ざすようになってきたりとかですね。あと不審者情報みんな寄せてみたいな、大人と見れば不審者と思えぐらいの、なんとなくそういう雰囲気があること自体も、社会の疲弊した部分、これが学校教育の中にも呼んでしまっているっていうのは、本当に残念だなと思いますし、そういう状況からなんとか出したいなと思っているところで、そのためにはやはり社会全体が平和になり、また、子供の教育に、よりよい環境にならなければいけないと、これは大人の務めでありまして、そういう環境を望んでいくわけですがけれども、ぜひ、子供達が直接触れる環境、それにおいては、今言ったようなあの安心して過ごせる。また、それによって大人が学校に入ってきたら、みんなで迎えてもらえる、もちろん教職員も含めて、誰もが気軽に学校に入れる。また、いろいろなボランティア活動も、また行こうと言う形で、お互いにいい気分に出迎え、また対応してというような環境ができるというなと思っております。社会環境的には難しいですけど、ぜひ袋井市内においては、それを推進して行きたいと思っております。ちょっと時間が少なくなってきましたけど、この前ですね、図書館について、また、本に対する話をしているとき、ちょっと面白い話題が出たので、委員のみなさんにも考えていただきたいなと思うんですけど、本を読むことのメリットみたいなものは、そもそもなんだと。例えば、私などは本が好きというか、大人の多くは本に触れることで読解力が増すとか、そうすると、結果としてこういう成果のために、生きて行く上のプラスになるからみたいなことを求める大人がいる一方で、例えば、館長はそうではなくて、本そのものが好きになってくれることが、人生を豊かにするんだっていう方もいるし。本を好きになるってなんなんだろう、みたいなこと。実は私、そんなことを思うようになりました。それを一つ考えてみるっていうのも、答えがないとは思いますが、それを考えてみることで、またいろいろな子供が本好きになるきっかけも得られるでしょうし、より図書館利用ということで、より深まった議論ができるんじゃないかなと思うんですけど、そのあたりでどうですか、みなさんに感じるものってありますか。なぜ本を読むのか、なぜ本を好きになって貰いたいのか。

●鈴木委員

私は、色々な世界を見る、いろいろな生き方を見る、いろいろな考えするというのが、私は、楽しいです。だから、いろいろな人もいて、情報的な部分を求めて本を読む方と、文学的な部分とか、色々いると思うんですね、自分は文学的な部分というなんです。

●大場市長

なるほどね。一つのテーマでも結構みなさん違うと思うんですね。色々あるなと思って、この前も聞いていましたけど、吉田委員はどうですか？

●吉田委員

私は大人になってから、実用書しか読んでないので、本当に知識を得るためなんですけど、子供の時はやはり疑似体験ができる旅行に行った気になるとか、ありえない状況を投影して感情を味わうみたいな、そういうところが好きでした。

●大場市長

子供たちもやはりいろいろな子供たちがいると思うんですね。その本が好きって、さっき出てきましたけども。それを考えるだけでもいろんな可能性があるんだろうなと思いますけどね。他に何か今回、図書館、本関係、これをぜひ言っておきたいみたいなことがあればお願いします。

●鈴木委員

自分が教職終わりごろの退職間際ぐらい、だから10年ぐらい前の子供達から、読み聞かせに集中できない子が、一年生に読み聞かせをした時に、集中できない子が出てきたなと。幼稚園も同じような状況だっているというので、その子たちは図鑑に行くんです。今、図鑑のブームで、いっぱいあるんですが、変な生き物とか、怖い生き物とか、図鑑とか迷路みたいなのところに行くので、多分それは家庭でもそういうテレビにしる、ゲームにしる、そういうことに触れてきた世代からかなって思うんですが、ここで地道にファーストブックからずっとやって、それってとても大事じゃないかなっていうのをすごく感じた時があります。図鑑の面白さはあるんだけど、絵しか楽しまない、図鑑って、絵と写真とか、ともにそこに説明がありますが、知識を広げていくっていうところまでいかない。だから、ちょっと子供が変わってきたなということを感じました。ちょっと前ぐらいから。

●大場市長

山本教育監、そのあたりってどうですか？

●教育監

読み聞かせが始まった頃、読んでる人の呼吸と子供たちの呼吸が、息するタイミングが一緒になったりね。こうぐっと世界がひとつになるなっていう感じがして、すごいなど、高校生ぐらいでもそうなることがあったりすると、すごいなど。技術もあるでしょうけども。鈴木委員が言うように、多少やはり集中力が欠けている子がぼつぼつ見られるようになっていて、そこに入れたい子がいるんじゃないかと、その雰囲気の中に別に嫌ってるわけじゃないんだけど、入っていけない子がいるのかなっていう感じはします。

●大場市長

やはり、ひとつ読み聞かせをとってみても、社会の変化だったり、時代の変化っていうのがあるわけですね。

●教育監

子ども自身がやはり発達系の凸凹がはっきりしてきたっていうのもあるのかも知れません。

●大場市長

確かに。時代といえば、ビブリオバトルとか、ここ数年でしょうか。10年はいってないかなと思うんですけど、出てきまして。読書に親しむって意味で一つの手法として取り入れられて来てはいますが、ビブリオバトル以外に、何かこの時代とともに、こういう方法で本好きを育てようとか、そういったものって何かあるんですかね？

●教育部長

今年もどこか中学校で。

●袋井図書館長

ビブリオバトルは、袋井南中と浅羽中で、今年もやりますよと言ってくれています。あと、袋井中学校ではビブリオバトルと一緒に、夏休みに本の紹介ポップを、子供達にこう作ってもらって、それを図書室に飾るっていうのもやっているという、色々中学生が興味を持ちそうなことやってくれています。私もコロナがだんだんおさまってきたので、子ども司書講座というものを図書館でやろうと思って、司書のお仕事体験しませんか、ということで、小学生と中高生の部っていうことで募集しています。中高生はそんなに来ないかなと話をしてはいたんですけど、意外にも中高生の申し込みが殺到していて、抽選しなきゃいけないか、回数を増やすかどうかどうしようということ、さっき出てくる時に相談をされたんですけど、やはり興味がある子供たちはいて、そういう「コト」を求めている子もいて、そこから図書館の仕事に興味を持って、本にも興味を持ってくれないかなということで、今年はやってもいいかなっていうことで始めるようにしたのですが、ポップを作ったりとか、そういった司書の仕事っていう面から本を好きになったりとか、という取り組みはいろいろやっております。

●大場市長

ポップは、やはり全国的に本屋さんの販売売上にはかなり貢献してるみたいですけどね。

●鈴木委員

ポップは、小学校の3年生ぐらいから、ポップを作ろうっていう教材が出て、けっこう作っていますね。

●袋井図書館長

帯を作ったりとか。

●大場市長

いいですね。

●鈴木委員

要約と兼ねてポップとかね。

●大場市長

そういった興味をひくようなものを積極的に導入していくといいかも知れませんね。

それではですね、議論ももう出尽くしたかなと思いますけれども、今日お話の中で、やはりまず本のために予算確保する。本のシステムの為にお金を確保するという事とか、司書の確保ということで、これもまたお金のいることで、本当に改めて予算が、お金が必要なんだなということを改めて感じました。先ほど私自身が申し上げましたように、この総合教育会議の一つの目的でもあらうと思います。もちろん必要だといっても、お櫃の米が増えるわけではないわけですが、ご飯が増えるわけではないんですけれども、優先順位、先ほどお話ありましたけれども、優先順位を考えながら、そうした子供たちのために、未来ある子供たちのために、図書、そして読書に対する興味関心を伸ばして、子供たちの未来がより良いものになるように、お金を確保しなければならないと改めて思ったところであります。そして今日は市立図書館、そして学校図書館との関わりなども述べさせていただき、ご議論いただきましたけれども、これもやはり関係性を今より強固なものにしようという活動も、図書館を中心としてやっていただいています。これをさらに進めていくことで、今日も何人かから実際に口に出していただきましたけれども、「まちじゅうとしょかん」というような形で、子供たちに身近なところで、本に接することができる。また、読むことができ、またいろんな触れ合いがそこにあるというようなことが実現して行くというのが必要なんだなと。また、図書館にはそういう役割があるんだなというのを改めて感じた次第であります。事務局としても、そうしたことを、より認識をしていただきながら、お金がかかるものとかからないものと、両方取り組んでいただくということでお願いをしたいと思っておりますし、今日、鈴木委員からも何度か出ましたけれども、ボランティアのみなさんの力をお借りするという事も含めて、取り組み、学校により行きやすい環境、また活動しやすい環境を作って頂くということも、また教育長を筆頭をお願いしたいと思っております。そして、今日、議論の話題には出ませんでしたけれども、本に親しみを感じる子供を作る、また、興味を持たせるために親の関わりってものすごく大事だと思うんですね。やはり本に親しむ親の子供はやはり本好きになりますし。特別にああしなさい、こうしなさいじゃなくて、親が本に接すれば、それを見れば自然とそういう環境に子供がなっていくということもあると思います。それが、本に親しむということが、様々な法律ももうできていて、本に親しむことが子どもの情操であったり、様々な教育にも効果があるということも示されております。そういった上で、やはり家庭環境、親

の環境、また大人の接し方が、子どもの本好き、本に親しむ姿勢を作ると言っても過言ではないと思いますので、そういったことも含めて、みんなで考えながら、より良い環境作りをみんなで一緒にしていただきたいと思います。教育委員のみなさん方は、その最先端で、どんな手法を袋井市の教育において実現して行くかということの本当に一つの最前線にいていただきますので、これからそうした視点を大事にしながら、本好きの子供達をどういうふうに育てていくのかということ、引き続き、いろいろな機会を捉えながら、お力添えいただければと思います。あつという間に時間が過ぎてしまいましたけれども、引き続きよろしくお願ひしたいと思っています。若干ありますけど、なんかこれだけ、あともう一つ何か言ったそうですが、大谷委員。

●大谷委員

図書に関して言うと、特にさっき言った文芸の部分で、さっき言ったいわゆる情緒の教育で、我々どうしても高尚じゃないですけど、ある程度昔のちゃんとしたいわゆる小説家、歴史的な名前が残る方の小説ってということだけじゃなくて、もしかしたら子供たちに関しては、例えば、漫画とか映画とかノベライズでもいいのかも知れないし、さっきちょっと出てきたライトノベルでもいいのかも知れないですけども、もっと実は敷居を低くしてあげてもいいのかなってところです。そもそも、本を読むか読まないかっていうところが大事なところで、ある意味で我々の大人の持っている感覚と、小学生とか中学生ぐらい、思春期までの子供たちが、特に、本、文芸というものに対する感覚に、もしかしたらちょっと差があるかも知れないんで、そこを少し譲歩してあげるっていうか、それでもやはり本を読んでもくれるんだったらいいんじゃないか、というところは、もう少し考えてもいいかなと思います。さっき、どなたかが言っていましたが、読む本がないと言う子がいたということですが、中学生が行っても恋愛小説ないということ。

●鈴木委員

でも、あるんじゃないので、って私は言ったんですけどね。

●大谷委員

もう古くていやだ、ということだったんでしょうか。

●鈴木委員

中学に何が入っているか分からないですが。

●大谷委員

そういうのが知りたいですよ。

●袋井図書館長

最近流行りの小説もどんどん中学校に入れていまして、推理小説だったりとか、今話題の本は、もう中学生だと大人の本を読むので、普通に私たちが読むような一般小説が入っています。昔のそれこそ芥川龍之介だったり、夏目漱石だったりっていうことではなく。

●大谷委員

この本を読みたいとか、図書館にはあるじゃないですか。

●袋井図書館長

リクエスト的なものも受けています。

●鈴木委員

携帯小説みたいなものを、中学生は見てるんじゃないかなと。

●袋井図書館長

それ以外にも、いろいろ面白いことを紹介して行きます。

●大場市長

はい、ありがとうございました。それでは、議事を終了とさせていただきたいと思いません。今日はありがとうございました。

4 閉 会

●石黒教育部長

みなさん、ありがとうございます。あつという間の時間でしたが、最後に市長にまとめていただく中で、親の関わり、それから保護者ですとか、地域のボランティアの参画、そうした人の関わりも大切にしたいという話もいただきながら、一番ヒートアップしたのは、やはりシステムが古いという部分ですが、それが今やもう必需品であるというお話の中で、そうはいつでもシステムだけではなくて、人の関わり、学校図書館へ参画する社会が大切であるというお話をいただいたりですとか、図書館の機能として、出会いの場であったり、交流の場、それから子供たちの居場所としての機能。そうした「まちじゅうとしょかん」的な機能も含めたりという将来性を見据えた中で、今後の図書館を考えていくべきだというようなお話にも及んだかと思えます。それから、子供達が興味を持つことに取り組んでいくということも、子供達にとって必要だという意見も後半にもあったかと思えます。お話を聞いていて、我々が取り組もうとしている内容が間違いではないという事の確認が取れたものですから、予算も含めて、事務局で一つ一つこの問題に取り組んでまいりたいと思えますので、折をみて、今日の状況の実現を、委員のみなさまにはご報告して参りますので、引き続き、みなさんの応援もよろしくお願ひしたいと思えます。それでは以上をもちまして、第1回袋井市総合教育会議の閉会いたします。本日はありがとうございました。

(午後2時50分閉会)